

後 序

まずはじぶんが面白いと思うものを見つけなさい。じぶんの関心を深めてそれを伝えるのが研究です。それからじぶんを取り巻く世界にも目を向けることを大切にしてほしい。卒業論文や研究にどのように取り組んだらよいかと質問する学生に対して、高橋先生はこのようにお応えになりました。

わたしにとってそれはまさに「翼ある言葉」でした。研究者として生きていく指針のひとつとなっています。もしかしたら京都大学に赴任して間もないわたしを意識してこのようにおっしゃってくださったのかもしれませんが。それまでの無用な緊張が解けて雲が晴れたように感じられましたし、あらためて西洋古典学専修で培われてきた自由な精神の息づく学びの場に属することに喜びを覚えました。

研究を楽しむ姿勢を示す高橋先生の言葉は、現在、新型コロナウイルスが世界的に蔓延する危機的状況だからこそいっそう大切な意味を持ちます。この2年間は大学も混乱の渦に巻き込まれました。学びの場や人文学の意義が改めて問われています。身動きのとれない息苦しい状況にあって、先生の姿勢は遙か古代にまなざしを向けながら学に根差した楽しみを实践する西洋古典の強さを浮き彫りにしています。それはホラーティウスが描く *carpe diem* に通ずる詩想だと思われました。

長きにわたり西洋古典学の発展に寄与し、教室を育んでくださった高橋先生のご退職にさいして、京都大学西洋古典研究会において献呈論文集の刊行が企画されました。論考は元同僚のクレイク先生とマルティン先生をはじめに、そのあとは論じる対象の年代順に配列されています。混迷のコロナ禍にあっても各人の関心に寄り添った論文集が完成にいたったことを、編者のひとりとして厚く御礼申し上げます。

先生から賜ったご指導とご厚誼とに深く謝意を表すため、『西洋古典論集』第26号を高橋宏幸教授に献呈いたします。

2022年1月 河島思朗